

朝鮮半島とはいかなる存在だったか

拓殖大学 学長
渡辺 利夫

現在の日本を取り巻く極東アジアの政治状況が日清戦争開戦前夜の状況と酷似していると説き、されば往時の政治指導者やオピニオンリーダーたちがその状況をいかに認識し行動したのかを改めて見直すことが、今日の日本の外交姿勢に少なくない示唆を与えるはずだと私は本誌前号（「極東アジアの地政学と陸奥宗光—『蹇蹇録』を読む」[RIM] 2007年、第7巻26号）で論じた。

ユーラシア大陸の強大国、中華帝国、ロシア帝国、モンゴル帝国などが日本への勢力伸張を図ろうという場合、朝鮮半島を通過せずしてそれは不可能であった。朝鮮半島の地政学的な宿命である。そのために日本にとっては朝鮮半島が敵対国となったり敵対勢力の影響下に入ることは絶対にこれを避けねばならなかったのである。その意味で朝鮮半島は日本の「主権線」（山県有朋）であった。みずからの臣下として朝鮮に強い権勢を張らんとする清国、これに抗する日本の戦いがすなわち日清戦争であった。

日清戦争全局の政治指導に当たった時の外務卿陸奥宗光の言説を素材にして日清戦争の意味を探ったものが前稿であった。しかし、

それでは李朝、特にその末期の朝鮮とは一体、なぜそれほどまでに脆弱な存在であったかと問わざるをえない。今回はこのことを考える素材を提供してみたい。当時のオピニオンリーダーの中で朝鮮の状況を最も深く憂慮していたのは福澤諭吉である。

福澤の文章はしばしば激越である。諸事象を観察してこれを痛罵し蔑視する際に用いる表現は少々極端である。朝鮮に対するほとんど侮蔑的な物言いは、今日いうところの「差別語」に近く、引用するものはばかられるほどである。

福澤の頭に棲みついて片時たりとも離れなかったのは、日本の「独立自尊」である。万延元年（1860）に咸臨丸で太平洋を横断し、文久二年（1862）に遣欧使節団、慶應三年（1867）に遣米使節団の一員として加わるという、三度の欧米視察を通じて福澤は確固たる世界観を培った。「西力東漸」の帝国主義的の時代にあって日本が亡国を免れるには「文明開化」以外に道なしとする信念—「共に文明の海に浮沈し、文明の苦楽ともと与にする外なし」（「脱亜論」）—であり、この信念に違う政策や振る舞いにはまったく容赦が

ない。

朝鮮がアンシャンレジームに固執するならば、遠からず清国、次いでロシアの植民地となること必定であり、日本の自立をも危機におとしめるというのが福澤の終生の思想であった。朝鮮の文明開化は朝鮮にとって不可避であるのはもとより、日本の自立にとっても絶対的な必要条件であるという信念が、福澤をして時に朝鮮の優柔不断を糾弾せしめ、時に清国の横暴専横を罵倒せしめた。朝鮮は本来であれば「共に亜細亜を興す」友邦であるべきだが、そうするのに必要な「文明開化」にどうして目覚めぬか、その焦燥が福澤の朝鮮に対しての痛罵の口吻なのである。

それにしてもである。李朝朝鮮の頑迷固陋は一体どうしたことか。このことを知るためには、往時の朝鮮半島を旅行したり居住した人々の伝言を検索してみるに如くはない。

明治二七年（1894）一月から明治三〇年（1897）三月までの間にモンゴロイドの特性調査の一環として四度にわたり朝鮮旅行を敢行したイザベラ・バードは、その著『朝鮮紀行—英国夫人の見た李朝末期』（時岡敬子訳、講談社学術文庫、1998）という、東学党の乱に始まり日清戦争が終焉するまでの朝鮮を克明に観察した著作の中で次のように述べている。

「朝鮮国内は全土が官僚主義に色濃く染まっている。官僚主義の悪弊がおびただしくはびこっているばかりでなく、政府の機構全

体が悪習そのもの、底もなければ汀^{みぎわ}もない腐敗の海、略奪の機関で、あるゆる勤勉の芽という芽をつぶしてしまう。職位や賞罰は商品同様に売買され、政府が急速に衰退しても、被支配層を食いものにす権利だけは存続するのである」

そして日本が朝鮮内で行おうとしている改革について同書は、「日本は朝鮮式機構の複雑多岐にわたる悪弊と取り組み、是正しようとした。現在行われている改革の基本的路線は日本が朝鮮にあたえたものである。日本人が朝鮮の政治形態を日本のそれに同化させることを念頭に置いていたのは当然であり、それはとがめられるべきことではない」という。

官僚主義の悪弊、腐敗、略奪、政府の衰退から朝鮮を救出するための改革を試みているのが日本だという評価であり、福澤の認識とバードの見解は似ている。バードのいう朝鮮の当時の官僚主義とはどんなものだったかといえ、こうである。

朝鮮の高級官僚は両班といわれ、科挙というきわめつきの難関である国家試験に合格した一握りの秀才たちであった。両班は文官（文班）と武官（武班）よりなるが、文治主義の根強い朝鮮においては圧倒的に文官優位であり、儒学の知識に秀でた文官が官僚機構の中樞に位置した。

絶対的専制君主を文官が取り巻き、国王の意思を支え体して彼らの合議によって国家統治がなされてきた。道の長官に始まり府、郡、

県の長にいたるすべてにおいて中央から派遣された官僚が支配者となり、彼らが統治の任に当たった。そうすることによって地方に根を張る権力集団の発生を厳しく抑圧したのである。多数の武人が多様な地方権力を形成した江戸時代日本の幕藩体制とはきわめて対照的な中央・地方関係が朝鮮の権力構造の特徴であった。

あらゆる「権力資源」が中央官僚によって独占された政治体制である。この体制が李朝五〇〇年余を通じて厳格に守られてきたのであれば、王朝体制はいかにも堅固なものだと思われようが、内実はその逆である。中央集権が極度に追求されたために、多様な利益集団や社会集団の形成が阻まれ、唯一残された集団凝集原理である血族に社会が「分化」していった。

朝鮮は父子関係を軸とし血縁を縦に継承していく原理において一段と強い社会であった。血族といい門閥といってもいいが、これが支配層両班の基本的単位であり、血族を横断的につなぐ社会原理は希薄であった。国王を取り巻く中央官僚が社会の頂点に位置し、相互に関係のない有力な血族集団が頂点を目指して競い合い、その競合の過程で生じた血族間の抗争は凄まじく、李朝史は血族抗争史として描くことさえ不可能ではないほどである。

この社会においては、富も名誉もその源泉は政治権力にあった。それゆえ中央権力を

求めて各血族がしのぎを削る権力闘争が李朝時代を通じて恒常的に展開されてきた。しかも朝鮮は文治社会である。それゆえ権力闘争の手段は武力ではなく理論であった。儒学の解釈をめぐり、みずからを正統とし他を異端として抹殺しようというイデオロギー闘争であった。アメリカ国務省のスタッフとして計7年をソウルと釜山で勤務し、後にアカデミズムの世界に入りハーバード大学国際問題センターなどで朝鮮政治分析に携わり、いまなおこの分野において第一級の著作として知られる『朝鮮の政治社会』（鈴木沙雄・大塚喬重訳、サイマル出版会、1973）を著したのが、グレゴリー・ヘンダーソンである。彼は同書において次のように述べている。

「李朝の政府とは、人びとを急速にそのなかにまき込んでしまう巨大な渦巻きであって、瞬時にして彼らを野心の絶頂近くに押し上げるかと思えば、次の瞬間には彼らを一扫し、しばしば呵責なく処刑したり追放したりするのであった。それは、田園ののんびりした四季のリズムとなんら関係のないものであった。……王朝は平静を装いながらも、興奮と論争に明け暮れたのであった」

もっとも、抗争に明け暮れていたのは支配層のみであり、圧倒的多数の常民と賤民が国政に顔を出すことなど想像さえできなかった。中間層が完全に欠落していたのである。再びヘンダーソンはいう。

「西洋的な意味では、朝鮮（少なくとも朝

鮮南部)には、中産階級というものは存在しなかった。共通の利害を持った広範かつ人口稠密な機能的集団、あるいは、地位集団が、両班と平民の間に確立されたことはなかった。朝鮮社会は、基本的に、あらゆる権利を持つ支配層とあらゆる義務を背負わされた被支配層との二極社会であった。独自の文化と商売という価値基準を持つ有力な中産階級という西欧、および日本における概念は、朝鮮には無関係であった」

李朝末期の朝鮮政治について観察したもう一人の外国人の記録を紹介しておこう。上述した血族間の抗争についてである。開国以前の厳重な鎖国体制の朝鮮に潜入し居住した唯一のヨーロッパ人集団が、パリ外邦伝教会所属のフランス人宣教師たちである。彼らからの通信を素材に書かれた『朝鮮事情』(金容権訳、東洋文庫、平凡社、1979)において、著者シャルル・ダレは次のように述べている。

「貴族たちは、いくつかの派閥に分かれ、互いに執拗な憎悪をぶつけ合っている。しかし、彼らの党派は、なんら政治的、行政的原理を異にするものではなく、ただ尊厳とか、職務上の影響力のみを言い争っている大義名分だけのものである。朝鮮における最近三世紀の期間は、ただ貴族層の血なまぐさい不毛の争いの単調な歴史にしかすぎなかった」[すべての貴族は、それら党派の一つに必ず属し、ただ高位高官を独占し敵対派の接近を排除することだけに腐心する。このことから、永続

的な不和と争いが生じるようになった。これらの争いは、多くの場合、敗北した党派の指導者の抹殺を期して終焉する」

加えて朝鮮は清国の属邦であり、両者は君臣の関係にあった。「清朝宗属関係」である。この関係が破壊されない限り朝鮮独自の「文明開化」はありえず、清国の朝鮮への影響力を削ぐことはできない。朝鮮の清国からの自立は日本の「自衛の道」(陸奥宗光)であり、その意味で朝鮮は日本にとっての「主権線」だというのが往時の日本の政治指導者に共通した認識であった。

シャルル・ダレは、清朝宗属関係の礼式を次のように鮮やかに記している。

「朝鮮国王は、新しく交替するたびに、特使を遣わして皇帝にその即位の承認を求めねばならない。特使はまた、王家に関すること、朝鮮で発生した主要事件について、すべて報告しなければならない。反対に、ほとんどの中国人使節が宮廷での品階では朝鮮国王より上位にいるために、朝鮮国王は、使節を迎えるときはソウル城外に出てつつしんで敬礼しなければならないし、そのうえ、使節が入城した門以外の別の門を通過してソウル城内に入らなければならない。……また朝鮮の特使は、国境をこえて最初の中国側都市である辺門城門を通過する資格がないので、仕方なく迂回しなければならない。朝鮮国王は、皇帝の使用する色彩は使えず、皇帝の冠に類似したものをかぶることさえ禁じられている。あるゆ

る民間の文書は皇帝年号の日付で表さねばならず、また重大事件が起こったときは、事態によって国王は祝賀か弔慰特使（慶弔使）を遣わさねばならない」

このように書いてくると李朝末期の朝鮮は、近代化という観点からいえばいかにも絶望的な存在である。しかし、かかる現実をきわめて否定的に認識し、現状の改革ができなければ朝鮮は壊滅するという危機感をつのらせ改革に身命を賭した一群の官僚がいたことをも銘記しておかなければ平衡を欠く。これら官僚が守旧派官僚に挑戦し、この改革運動

を日本が後押ししたのは当然であった。結果を先取りしていえば、守旧派に対するこの改革派の挑戦が無惨にも潰え、その悲劇的結末が日清戦争開戦への日本の意思を固めさせ、これに日本が勝利し、次いで日露戦争にも勝利して、これにより最終的には韓国が日本に併合されるという結末を迎えるのである。李朝末期の改革派のリーダーが金玉均であり、これに熱い支援を送りつづけたのが福澤諭吉であった。金玉均と福澤諭吉との交流は一篇のノンフィクションたりえる。いずれ本格的に論じてみたい。